

はじめに

ハイデガーにおける「現存 (Anwesen)」にかかわる表現については、これまで、相異なる見解が示されてきた。例えば F.A. オラフソンが、ハイデガーの「プレゼンツ」概念を意味する場合の「現存」および「現存性 (Anwesenheit)」を『存在と時間』の時期以降後期に至るまで、一貫してハイデガー自身の存在概念を表現するものとして重要であると見る⁽¹⁾のに対して、T.カルマンは、この「現存」という概念こそ、ハイデガー哲学全体にとっての批判的な考察の対象であったのだと主張し論争になったほどである⁽²⁾。また別の論者は前期のハイデガーにとってはこの概念は批判の対象であったが、後期に至ってハイデガー自身の存在概念へと変貌したのだと考えるべきであるとする⁽³⁾。「現存」概念のハイデガーの思索における位置づけとその変化を明確にすることは、ハイデガーの存在の思索全体の理解のために重要であると言えよう。

本発表では、1925 年頃から 1960 年代にいたるまでの講義や著作等におけるハイデガーの現存 (Anwesen) 概念を、1. 主著『存在と時間』(1927) 執筆の時期、2. 1930 年代前半の時期、3. 1936 年以降の後期思想の時期に区分したうえで吟味検討し、ハイデガーにおける現存概念の意味内実の時期による変遷およびそれらを貫く存在の思索の一貫した観点を明らかにすることを試みたい。

1. 『存在と時間』(1927)執筆前後の時期における二つの現存概念

オラフソンも指摘するように、『存在と時間』においては、二つの「現存」概念が見出される。これらはどちらも、既にこの主著の執筆時期に為されたと思われる講義の内にも見出されるものである。これら二つの現存性概念とは、①古代ギリシアのウーシアを意味する場合の現存性概念と、②ハイデガー自身の基礎存在論の枠組みのなかでの現存性概念である。同じ語が用いられている以上、両者には、人間における存在理解を表現するものであるという共通点もあるが、明らかな相違点もある。それは、古代ギリシアにおけるウーシアの訳語としての Anwesenheit のほうは、それを了解する主体が、肉眼にせよ、理性や悟性の目によってにせよ、ギリシア人たちが存在をありありとその眼前に見て、直観することができるようななかたちでの、人間にとっての存在の臨在であるのに対して、ハイデガーの基礎存在論においては、もっぱら環境世界の意義連関の存在といった、現存在自身の身の回りの道具的な存在者との関わりと、そうした関わりを可能化している全体の有意義性の連関といった、眼前にはみることのできない、すでにもうその内に住み、その内に生きてしまっているものの「現存」が意味されている、ということである。

2. 1930 年代前半の時期における現存の概念と現在の概念の明確な分離

1932 年夏学期の「西洋の原初」講義では、まずアナクシマンドロスの箴言が取り上げられ、存在者の立ち現れと隠れについて基準を与えているものとしてのピュシスとしての時間と存在が見定められる。次に中間考察において、そうした

存在者の存在了解の場となりうる人間の実存が見定められ、最後のパルメニデス解釈において、存在の現存と現存在の存在了解において存在が露わとなる非秘匿性としての真理の生起の場が見定められる。このパルメニデス解釈においてハイデガーは、存在がその秘匿された状態から露わとなってくる、存在の真理の場における存在の動性を現存性 (Anwesenheit) と呼び「存在は認取の現在 (Gegenwart) において現存性 (Anwesenheit) として生き生きとあり続ける (west)」のであり、この「現在において生き生きとある続ける現存性」が「私たち自身が時熟してゆくところの時間」であるとしている (GA35,179)。この講義では現在 (Gegenwart) と現存 (Anwesenheit) の語を明確に区別して使用し、後者は「存在者の存在の性格」であり、前者は「現存性について形成しつつ見えるようにするその仕方 (die Weise des bildenden Ersehens von Anwesenheit)」(GA35,178) であるとする。存在の側からの立ち現れと、存在の真理の場においてその現存してくるその存在の立ち現れを認取するいわば現存在の側の動性とを、二つながら見てとりつつ、存在の側からの動性を Anwesenheit の語を用いて言葉へと齎す努力を開始していると言える。

3. 1936 年以降の後期の思索における現存概念

ハイデガーは、後期思想の出発点と目される『哲学への寄与』(1936-38) において存在 (Sein) とは区別して、それ自体としては人間に対して露わにならない「奥深い存在 (Seyn)」の「生き続ける働き (Wesung)」に言及するとともに、この奥深い存在の生き続ける働きが現存してくる動性を、「現存の働き (Anwesung)」という語をもって表現しようとしている。さらに 1946 年の『アナクシマンドロスの箴言』では、こうした存在の側からの動性への洞察を背景として存在の歴史の展開が思索され、それぞれの哲学者たちによって見て取られた存在の「現存 (Anwesen) の根本特徴」が、エネルゲイア、エオン、イデア、ロゴスなどの語において表現されているとされた。また 1950 年代には、現存してくるものと、現存の働きとのあいだの二重襲そのものが思索され、1960 年代においてはこうした現存性が存在の「贈り」として見届けられた。

結論

現存概念は、1932 年頃から存在の側の立ち現れを表現する言葉として専ら用いられるようになったと考えられる。現存をその動性と切り離して捉え、これのみを「存在」と見ることは常に批判の対象とされるが、存在の真理 (非秘匿性) の構造全体のなかでの存在の立ち現れの動性を表現するものとして捉える場合には、一貫して存在の思索の重要な契機を表現する概念であったと考えられる。

注 (1) Cf. Frederick A. Olafson, Individualism, subjectivity and presence: A response to Taylor Carman, in *Inquiry*, 37, 1994, pp. 331-7

(2) Cf. Taylor Carman, On being social: A reply to Olafson, in *Inquiry*, 37, 1994, pp. 203-223

(3) Cf. Juan Pablo Hernández, How Presenting (Anwesen) became Heidegger's concept of being, in *Universitas Philosophica*, vol. 38, 2011, p. 213